

「対（つい）」を使い、表現力・思考力・学習意欲を高める工夫

～国語科を中心にした実践を通して～

大阪市立高津小学校

藪下 泰弘

1 はじめに

我が国は、急激な超少子高齢化と人口減少社会を迎えている。人口が自然減少することで、地方の消滅危機、産業構造の変化や格差の拡大やその固定化が懸念される。そのため、社会維持や発展のためにもグローバル化はさらに急速に進み、海外と日本の人材の流動性も高くなる。その中で技術革新に伴う、職業の在り方は急速に変化していくことが予想される。例えば、今ある職業の多くが存在しなくなったり、もしくは新たな職業に入れ替わったりするのである。このような社会の成熟化に伴い、どんな状況の変化にも対応しうる知識・技能・態度を備えることを基本として、より実践的かつ、国際的に通用する人材や、新たな技術や技能を素早く修得して、変化に対応し続けることができる人材を育成することが社会から求められている。

以上をふまえた上で、さらに「生きる力」を育むために「学習意欲を高めながら生きて働く『表現力・思考力』を身につける」授業づくりに励まなければならない。このような授業づくりを展開するとき、児童が「参加したい」「考えたい」「伝えたい」と思い、より能動的に参加できる方法を工夫していく必要がある。

そこで本研究のテーマを「『対^{つい}』を使い、表現力・思考力・学習意欲を高める工夫～国語科を中心にした実践を通して～」とした。

2 研究の基本的な考え方

まず、「対」とは、「1対1で対応させ、『比較』して考える」ということを指す。

「比較」することは「論理的な思考」をする際の基本と言える。例えば、いくつかの場

面や出来事を時間や手順等を「比較」して並べることで、「順序性」がわかるようになる。また、目的に合う観点を決めて、いくつかの事象を「比較」し、まとまりをつくることで、「類別」をすることができる。さらには、ものごとの原因と結果を「比較」し、結びつけることで、「～だから…になった。」と「理由づけ」をすることもできる。このように「比較」は事象を正確に把握したり理解したりする上で重要なツールといえる。しかし、学習の中では、児童の多様な考えを認めながら授業をするため、意見を「類別」したり、「理由づけ」したりする時間を裂くことが多くなる。そのため、「相違点が分かる」「共通点がわかる」と思考力を高めことはできるものの他単元・他教科で「思考力・表現力・学習意欲」をすぐに働かせることは難しい。

そこで、比較する情報を二つに絞り、『対』＝『1対1の対応』を利用し、考える対象を指導者が意図的に絞ることで、児童の学習への集中力や目的意識を高めることができると考えた。この意識が高まることで、より深い理解や思考を促すことができると期待できる。理解や思考が深まることで、より生きて働く知識や技能が身につけやすくなると考えた。このように『対』を使い目的意識の高い学習活動が内容や学び方への理解を深めると共に、学習過程（学んだこと）がより記憶に残りやすくなる」ので、他教科で知識・技能が生きて働くようになると仮定する（仮説を立てる）。

以上のことをふまえ、3つの視点に基づいて研究をすすめる。

- (1) 「対」を使い、表現力を高める工夫
- (2) 「対」を使い、思考力を高める工夫
- (3) 「対」を使い、学習意欲を高める工夫

3 研究の実際

- (1) 「対」を使い、表現力を高める工夫

- ① 交流時の「内側」と「外側」の「対」
内側のグループ（4～6名）で話し合う児童と、外側から話し方を学ぶ児童に分

かれた後、全体交流につなげた。方法としては、(下の図 1 のように) まず、習熟度別に●児童は内側に入る。

〔図 1〕

次に内側に入った児童だけで 5～10 分話し合いをする。このとき、指導者は助言や支援をしない。話し合いが滞った場合、外側にいる○児童も話し合いに参加してよいことを指導者が示唆する。最後にクラス全体で話し合い、評価をする。評価の際は、よかった点、改善点、質問、付け足しをおこない、話し合いの中で大事なポイントを指導者が適宜、指摘・助言できるようにする。指導者は話し合いが活性化するように児童と同じように話し合いに参加する。大事なことや曖昧なことは繰り返し本文を読んだり、児童が友だちの意見を復唱したりできるようにし、具体的に確認する。



○单元名：読んで、自分の考えをまとめよう

○教材名「動いて、考えて、また動く」

(1 学期 6 月)

＜本単元のねらい＞

「本教材に書かれている内容や書き方」と「自分の経験や考え」を比べながら読むことにより、自分の思いや考えを理由や事例を挙げて書いたり発表したりできるようになることである。話し合いを通して、共感しながら教材を読みすすめ、目的に応じて「筆者の考え」や「書き方」を学べるようにした。

＜本時の学習課題＞

- 速く走るための工夫でよくわかるところを見つけ、交流しよう。

＜話し合いの内容 1：内側の●児童＞

A：本文「足を思い切り後ろにける」から、悪い例を先に言っているので、後で良い走り方を読んだときにわかりやすい。

B：Aさんの意見に付け足して、ひざを高くあげるのは「地面を強くふむため」であって「足を思い切り後ろにける」ためでないことがわかりました。なぜなら、地面を強く踏まないで力が足に力が入らない

からです。

C：「忍者がびたあっとくんだり坂をかけ下りていくような感じ」からすうと進むのがイメージできてわかりやすいです。

D：「両手を後ろに組んで走ってみてください。速く走れる人はいないでしょう。」から腕をふらないと走りにくいことがイメージできてわかりやすかった。

E：「いろいろためしながら、自分にあったあしの動かし方や、うでのふり方を考えました。」から自分にあった足やうでの動かし方を見つけることが速く走るためには大切だとわかった。

＜指導者の支援 1＞

まず、児童の発言で長くて意味がわかりにくい場合は、適宜、初めの主語と終わりの重要だと思う述語をつなげて、できるだけ短く言えるようにして、全体に周知できるようにした。

次に、児童の代わりに聞き落としたところを内側の●児童に聞き、今までの意見を振り返り確かめた。その後で、外側の○児童に付け足しや新たな意見をいうように指示した。

＜話し合いの内容 2：外側の○児童＞

F：Cさんに付け足して、「忍者」と書いてあるので、イメージできる。

G：Dさんに付け足して、右あしをだしたときに左うでを前にふる、左あしを出したときに右うでをふるようから、順序よく説明していてわかる。

H：DさんやFさんに付け足して、腕をふると「バランスがとれる」ことがわかる。

I：Eさんや○○さんと似ていて、「いろいろためしながら」から自分にあった足や腕の動かし方を「ためす」から速く走れるんだとわかった。

以上のように内側の○児童の発表の仕方を見て、聞いて学ぶことで、自分の意見に自信がない外側の●児童も、自然と友だちの発言につなげて自分の意見をいうことができていた。

＜指導者の支援 2＞

児童の表現力を高めることができるように「自分の意見」と「友だちの意見の中で一番心に残ったもの」を比べた。その上で、友だちの意見と自分の意見を組

み合わせたり、一番良い事柄を選んだりして、「速く走るための工夫」をまとめるように指示した。

例① 速く走るためには、 まず、 次に、 最後に、 だと思ひます。 理由は、 だからです。	例② 速く走るためには、 だと思ひます。 理由は、 だからです。
--	--

上のような例示を示すことで、児童は自分にあった文型を選んで、下のようにまとめることができた。

＜児童のまとめや感想＞

- ・うでをふることが大切だと思ひました。理由はうでをふらないと体全体の「バランス」がとれないからです。
- ・速く走るためには、まず、地面を強くふむ。強くふむと走りやすいからです。次に、体の下に足を自然に下ろすとすうっと進みます。最後にうでをふることで、バランスがとれます。

本実践後のアンケート調査結果（25名に実施）

- ・「表現の仕方」や「発言をつなぐ方法」を学ぶことができたと思う。児童数 24名（96％）
- ・積極的に話し合いに参加できたと思う。

児童数 25名（100％）

- ② 全教科において、隣のペア学習と前後のペア学習を行い、友だちと自分の意見を比べやすくしたり、話し合い（表現）に慣れさせたりした。

高学年では、一人で考えて「自分の考え」をノートに書いた後、4～5人のグループで話し合うことが主流になっている。しかし、これは、低学年や中学年の積み重ねがあつてこそ、滞りのない話し合いとなる。

しかし、積み重ねがあつてもたくさんの時間を要してしまうことがある。加えて、全体交流で十分な時間が取れなかったりすることもある。また、自分の意見と3～4人の意見を比べながら聞いているうちに、集中力が切れてしまったり、

グループ交流で満足してしまったりして、全体交流の参加に消極的になってしまふ児童が多かった。

そこで、全教科を通して、一人で自分の考えをもった後、隣のペアで2分間交流した後、前後のペアで2分間交流できるようにした。そのような積み重ねの結果、一人学習をした後、指示をしなくても、「先生、隣と交流してもいいですか。」と交流を望む質問をしたり、隣同士が一人学習を終えると、指導者の指示がなくても、進んで交流したりする児童が見られるようになった。

児童から以下のような感想を得ることができた。

＜児童の感想＞（22名に実施）

- ・グループでの交流に比べ、自分の考えと友だちの考えが比べやすかった。
- ・グループよりも話しやすい雰囲気があつた。
- ・短い時間の話し合いなので、疲れにくかつた。
- ・自分の考えを友だちに一度伝えることで、自信をもつことができた。

（2）「対」を使い、思考力を高める工夫

- ① 物語教材文「ごんぎつね」では主人公のごんの気持ちの変化を「対」となる言葉を使い、正確に読み取ることができる。

本教材「ごんぎつね」は主人公ごんがいたずらをしてしまった兵十に対し、償いをする。しかし、その思いが十分に届かず、結末を迎えることで、「わかりあえることの難しさ」を感じさせる物語である。ごんが、繰り返し償いをしていく中で、同じ境遇である兵十に「かわいそう」という『同情』や「自分と一人ぼっちの仲間」という『共感』の念を強めていく。そのような中で、ごんと兵十と間に、心の距離が縮まる。本教材では、児童が「対」となる言葉を理由付けて活用できるようにしたり、中心となる場面と場面を「対」

にして読めるようにしたりすることで、登場人物の気持ちの変化を正確にとらえながら読むことができるようにした。

<指導計画>

- 1 h…単元のねらいを知り、教材文を読み初発の感想を書く。
- 2 h…初発の感想を元に学習課題を作る。
- 3 h…「ひとり学び」をする。
- 4 h…「ひとり学び」をする。
- 5 h…なぜ、ごんがいたずらばかりするのかを交流する。
- 6 h…なぜ、ごんが栗や松茸を兵十に届け続けたのかを考え、交流する。
- 7 h…兵十とごんの心の距離が一番近づいたところを交流する。
- 8 h…最後の一文から想像したことを交流する。
- 9 h…単元のねらいを達成するために考えをまとめ、友だちと交流する。
- 10 h…並行読書に対する読み取りや考えを表現する。
- 11 h…並行読書に対する読み取りや考えを表現する。
- 12 h…並行読書に対する自分の考えを友だちと交流する（1）
- 13 h…並行読書に対する自分の考えを友だちと交流する（2）

授業の実際には、本時に入る前に、3 h・4 hの「ひとり学び」で、「同情」と「共感」の意味を調べておくように指示して置き、授業でその二つの言葉に焦点をあてて交流をした。

<6h 学習課題>

- ・なぜ、ごんは兵十にくりやまつたけを届け続けたのか。

<児童の発言>

- A 兵十は、まずしいくらしをしているから、ごんは兵十のことを「かわいそう」と思って届けている。
- B「おれと同じひとりぼっちの兵十か。」からごんは自分と同じ立場で「兵十がさみしい」と思ったから。
- C お母が死んだことに対するつぐない。
- D「その次の日には、…次の日も…その次の日には、」と栗を送ったのは兵十がかわいそうだったから。
- E ごんの「つまらない・引き合わない」から、ごんは兵十からお礼（気づいて）がほしい。

<指導者の発問>

これに対して、4段階に分けて発問を行った。

- 「ひとり学び」で先生が指示して、調べた言葉は何でし

たか。その言葉を使って、ごんが届け続けた理由を考え、気持ちの変化をとらえましょう。

この発問で、児童は「叙述」と「同情・共感」を対応させなで、再び考えながら読むことができていた。

- なぜ、「つぐない」のための栗を届けたのに、その次の日、その次の日と栗を届けたのでしょうか。

この発問で、児童は「叙述」の中に「同情と共感」が入り混じるが、「同情」が強いと思う児童が多かった。

- 「つまらない・引き合わない」からお礼がほしいからと言っていますが、これも「同情」が強いですか。

この発問で、児童はこの叙述に対して「同情」と意味付けることは違和感があり、「共感」と答えていた。

- ごんにとって、「共感」というのは、みんなの言葉でいうと、どのように置き換えることができますか。

この発問に対して、児童は、

- ・一人ぼっちどうしががんばろうな。
- ・友だちになろうな。
- ・相談にいつでも乗るで。

と発言していく中で、

- ・「共感」というのは、そういうことやたなか。

と「同情＝かわいそう」と比較して考えることで、「共感＝友だち、いっしょにがんばろう」に対する意味への理解を深めることができていた。

<7h 学習課題>

- ・ごんと兵十のきょうりが一番近づいたところを考え、交流しよう。

<児童の発言>

- ・5 場面でごんが兵十の「かげぼうしふみふみ」が一番、距離が近いと思います。理由は、声が聞こえるほどの距離だからです。
- ・6 場面の「ごんおまえだったのか、いつも栗をくれたのは。」…ごんと兵十が話をしているから一番近いと思います。

<指導者の発問>

この二つの意見に焦点をあてたあと、この二つを比べて、「一番近い距離は、どちらですか。」児童に発問した。

<発問後の児童の発言>

- ・ 6 場面では兵十はごんを見ているし、会話もしてる。
しかし、5 場面では、兵十はごんに背中をむけているから 6 場面の方が近い。

<指導者の追加発問>

- ・ ふたつの距離に名前をつけるとどんな距離ですか。

<指導者の追加発問に対する児童の発言>

- ・ 5 場面は「長さの距離」だけです。だから兵十は分かり合えてはいません。
- ・ 6 場面は「長さの距離」と「心の距離」があるから兵十はごんのことがやさしいとわかった。

だから、6 場面が一番近い。

このように 5 場面と 6 場面对比させることで、「距離」の中に「心の交わり」があるかどうかを児童自身の力で、登場人物の気持ちの変化をはっきりとらせることができた。

この授業の後日、道徳科の学習「ぼくらだってオーケストラ」では、「なぜ、音楽の苦手な主人公てつおが『真っ暗な気持ち』から『心がはずんで』音楽会に参加できるようになったのか」を考える学習を展開した。

<学習課題>

- ・ なぜ、てつおの気持ちは大きく変わったのか。

上の課題に対する児童の導いた理由付けの考えとして、以下の二つに分類できた。

- ・ 自分の努力のおかげ
- ・ 友だちのおかげ

たくさんある児童の意見を大きく二つ分けて「対」にした。その結果、交流の中で児童が、「ごんぎつね」で習った言葉「共感」を活用し説明することで、まわりの児童がもっていた道徳教材文に対する解釈を変容させたり、解釈に対して確信をもたせたりするきっかけを作った。

<児童の発言>

- ・ サブ主人公「なつみ」さんが主人公「てつお」に一つ一つ丁寧にリコーダーを教えたから。
- ・ てつおがリコーダーをふけるようになったことを、自

分のことのように喜んでくれた。

これらのことから、なつみがてつおに『共感』していることがわかる。だから、てつおはそのおかげで、てつおの気持ちが大きく変化して、音楽会が楽しみになったと思います。

以上のように友だちの意見を関連づけながら国語科で学んだ言葉を使って、理由付けをおこなうことで、さっきまで、「自分の努力のおかげ」と言っていた多数の児童も「なるほど、共感か…」といった具合に納得し、考えを変容させている様子を見せていた。

このようなことから、「共感」という言葉の意味を国語科の「ごんぎつね」を通して理解していたため、発表中も自然に使えた。また、クラス全体で「共感」の意味を共有し、理解しているので、多くの児童が意見の意味付け（深める発言）に対し、合点がいったのだと考える。

(3)「対」を使い、学習意欲を高める工夫

① ひとりまなびにおける「自己評価」と「指導者の評価」の「対」

ごんぎつねの指導計画にもあるように大阪市小学校教育研究会国語部の中高学年における研究授業では「ひとり学び」を2時間程度とることが多い。ねらいは2つある。一つ目は、学習のねらいに沿って教材文をひとりで読んでおくことで、それが、予習の役目を果たし、その後、学習活動で自分の考えをもったり、交流したりする際の基盤になる。

二つ目は指導者が「ひとり学び」で書いた記述内容を確認して

書き方がわからないとき活用できる

氏名	学年	組	番	名前
たのしみ	5	1	1	たのしみ
おもしろ	5	1	2	おもしろ
おもしろ	5	1	3	おもしろ
おもしろ	5	1	4	おもしろ
おもしろ	5	1	5	おもしろ
おもしろ	5	1	6	おもしろ
おもしろ	5	1	7	おもしろ
おもしろ	5	1	8	おもしろ
おもしろ	5	1	9	おもしろ
おもしろ	5	1	10	おもしろ
おもしろ	5	1	11	おもしろ
おもしろ	5	1	12	おもしろ
おもしろ	5	1	13	おもしろ
おもしろ	5	1	14	おもしろ
おもしろ	5	1	15	おもしろ
おもしろ	5	1	16	おもしろ
おもしろ	5	1	17	おもしろ
おもしろ	5	1	18	おもしろ
おもしろ	5	1	19	おもしろ
おもしろ	5	1	20	おもしろ

おくことで、児童が、どこを根拠に自分

の考えを構築しているか、どのような内容を正確に捉えられているかなど、読みの習熟状況をあらかじめ確認し、発問などに生かせることである。

今回の「ひとり学び」では、自分の達成度を A 満足、B 十分、C 努力を要するといった 3 段階の自己評価をさせた後、指導者が評価するようにした。

児童が C (B) と否定的な評価をとった場合、指導者が B (A) の評価をできるようにする。逆に自分に対して高評価をしている児童には、B⁻ (ビーマイナス) や A⁻ (エーマイナス) というように若干低めの印象を与える程度の評価をすることで、指導者の助言を受け入れられる心境にもっていけるようにした。指導者は「なぜ、児童の自己評価より指導者の評価が高いのか、低いのか、(同等なのか)」を説明することで、児童は国語の基本的な表現方法を確認するとともに、自己への肯定感を高めたり、維持したりすることでき、学習意欲を高めたまま、「ひとり学び」に取り組むことができた。

このとき指導者の評価の仕方としては、以下の 3 点に留意し、助言したり、良い点を認めたりした。

<指導者の評価・助言の観点>

- i 字数が満たしていること
- ii 叙述を基に自分の考えが書けていること
- iii 児童一人一人の考えを具体的によいところだけを認め、評価が B や C の者へは、どこをどのようにすれば、評価を上げることができるかを助言すること

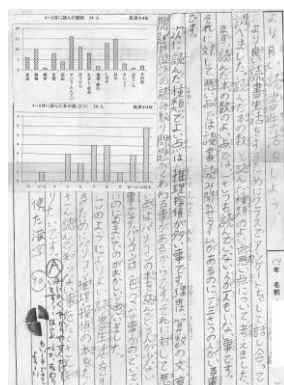
<児童の感想>

- ・ 自分が意外とできていることが嬉しくてやる気がでた。
- ・ 先生がすぐに評価してくれるのでやる気がでる。
- ・ 考え方や書き方がわかってきて、おもしろいのでやる気がでる。(わからないときは、ヒントもあるので考えやすい。)

② 「習得 (一つの単元で)」と「活用 (一つの成果作品)」の「対」

毎単元の最後に学習したことを以下のような報告文や感想文や紹介文リーフレット等の成果作品として残した。

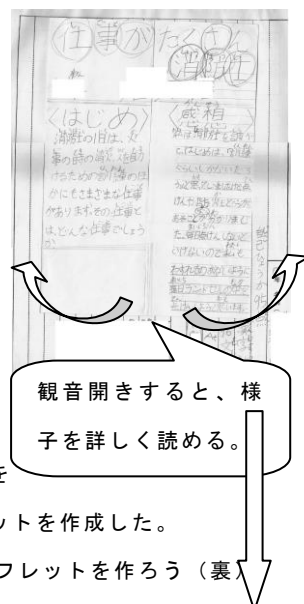
〔4 年 5 月単元：読書生活について考えよう (光村)〕



資料からよりよい自分の考えをまとめることができるようにクラスでアンケートを取り、集計したものを資料とした。そこからわかることを交流し、考えを深められるようにした。

〔4 年 11 月単元：仕事リーフレットを作ろう (表)〕

前単元の教材文「アップとルーズで伝える」を通して写真を使った説明の仕方について考えた後、社会科の学習と関連付けて、「消防」と「警察」の仕事に対する理解を深めることもねらいに入れて、教科書からの引用だけではなく、写真に対応した説明を



考え、仕事の紹介リーフレットを作成した。

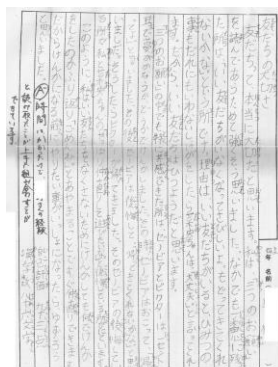
〔4 年 11 月単元：仕事リーフレットを作ろう (裏)〕

一番よいと思うも友だちの作品にシールを貼り合うことで視覚的にどれが良いかをとらえられるようにした。



〔12 月単元：物語を読んで、感想文を書こう〕

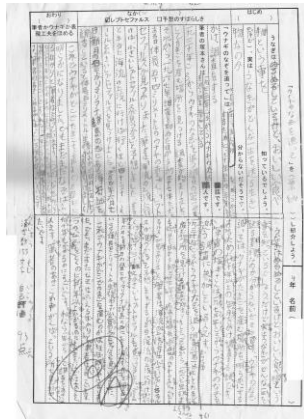
「三つのお願い」を読んで
教材文で、友だちを大切にすることを改めて学んだ。そこで、共感できることを本文から取り上げ、自分の経験とおりまぜながら、感想をまとめるようにした。



〔1月単元：科学の読みものをしょうかいしよう〕

「うなぎのなぞを追って」

レップトセファルスの様子や調査、調査前の2つの予想ですぐれているところについて考えた後、伝えたい本文を引用したり、要約したりして、紹介文を書いた。上部で下書きをした後、下部で、清書をした。

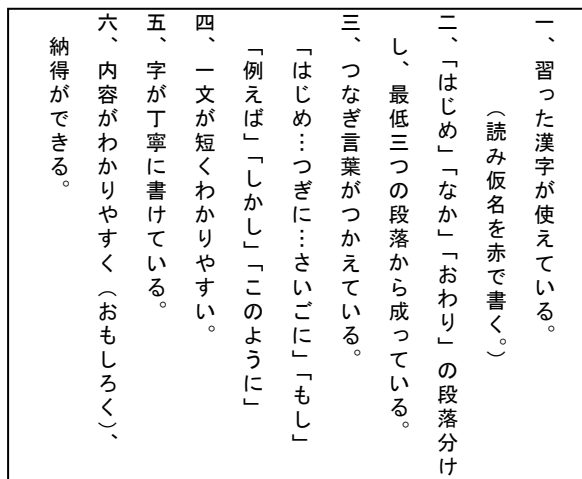


＜児童の感想＞

- ・できあがりを楽しみだから作りたい。
- ・作った後、みんなで読み合うのが楽しいから作りたい。
- ・書く力ついたと感じるから作りたい。

③ 単元の最後にする「自己評価」と「相互評価」の「対」

成果作品が完成後、自己評価や相互評価しあう際に、具体的にどこがよいか、認めらるよう以下に以下の観点を常に掲示した。



その結果、学びを次の単元に活かそうとする児童が多く見られた。また、友だちに書き方や内容の指摘をうけたことを添削し合うことで、表現の質を高めたり、表現の幅を広げたりすることができた。

＜自己評価の感想＞

- ・前の単元に比べて、漢字を書く量が増えたのがうれしい。
- ・「はじめ」は全体の紹介。「なか」は具体例・理由・説明。「おわり」は自分のまとめを書けばよいことがだ

んだんわかってきた。

- ・最初は、難しかったけど、なれたら読んだり書いたりするのが楽になった。

＜相互評価後の児童の感想＞

- ・字をていねいに書いた方が見やすくなり、友だちに伝わるので、いいと思った。
- ・友だちがぼくのいいところをほめてくれるので、これからも続けようと思った。

④ 社会科における自分の立場を明確にするための「対」を含んだ学習課題

＜本単元のねらい＞〔3学期実施〕

県内の特色ある地域「古い町なみが残る富田林市」と「だんじり祭りを支える人々（岸和田市）」を的確に捉えることができる。

＜本時の学習課題＞

- ・岸和田市と富田林市の町の特色について調べよう。

＜発問＞

- ・もし、君たちが引越しするなら、どちらがいいですか。引越したいと思う方を調べて、反対の意見の人を説得してみよう。

＜話し合いの様子＞

○ 「岸和田市」引越し派の人の意見

- ・だんじりを一つ一つ手作業で作っていてすごいから。
- ・祭りのときは、観光客も来るのでにぎやかで、元気になるから。

● 「富田林市」引越し派の人の意見

- ・古い寺が多く、歴史があり落ち着くから。
- ・重要伝統的建造物群があり、毎日けんがくできるから。
- ・住むのなら、にぎやかな街より、しずかな町の方が住みやすいから。
- ・観光客も来て、にぎやかなときもあるから。

いつもは発表に消極的な児童が岸和田派にたくさんいたので、以下のような発問をした。

＜発問＞

- ・岸和田市の祭りのときは、にぎやかすぎるで、「うるさい」とも感じ、富田林市に比べて、住みにくいときがあるのではないのですか。

これに対して、いつもは話し合いを傍観したり、聞く側に徹底したりする児童が発

言しだした。

<児童の反論>

- ・岸和田市は、祭りのとき、にぎやかすぎるかもしれません。いつもにぎやかすぎるわけでもありません。それに、お祭りの時には観光客がたくさん来るので、富田林市に比べて、にぎやかで楽しいと思います。

発表をしない印象をもつ児童が発表することで他の児童も積極的に話し合いに参加するようになった。

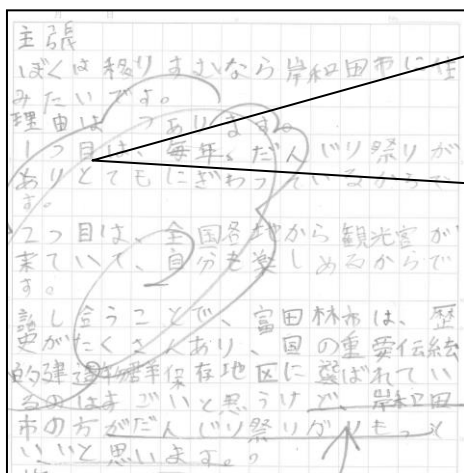
- ・反対で、岸和田より古い歴史があり、観光客もくるので、富田林市に住みたいです。
- ・付け足して、岸和田市はにぎやかかもしれないけど、富田林市は重要伝統的建造物郡が認定されています。
- ・反対で、古い歴史は素晴らしいけど、地震等があったときに壊れやすいので、住むのには不安です。
- ・それなら、岸和田市も不安があると思います。祭りで、だんじりに巻き込まれて観光客も事故にあったと聞いたことがあります。

と、このように友だちの発言につなげ、教科書の情報や自分の知識を結びつけて、積極的に発表する様子が見られた。

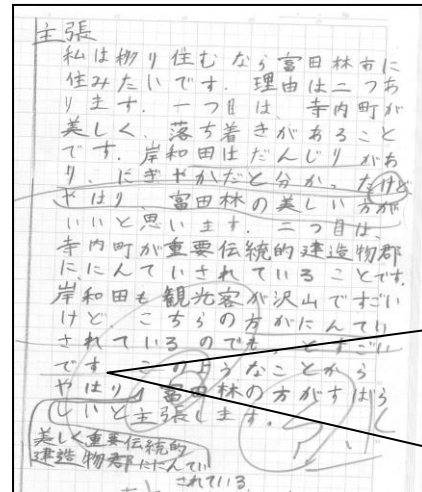
<まとめをする際の指示>

話し合いをふまえて、はじめ（主張）、なか（理由、説明）、おわりに分けて黒板に書かれた言葉や順序や対比を表すつなぎ言葉を使って、自分の考えを書いてみよう。

全ての児童が、国語科で学んだ、文章の書き方を生かして、上手に自分の意見をまとめることができていた。



【いつも交流で消極的な児童の「まとめ」】



表現が得意な児童は、相手の意見を「比較」し、「～だけれど…」と、自分の意見を主張し、自分のまとめに説得性を持たせようとしている。

【いつも交流で積極的な児童の「まとめ」】

この授業の後、「先生、また、討論会せへんの？」という児童の声が多かった。

4 成果（○）と課題（●）

- 表現力を高めるために、モデルを見せた後、自分で実際に試してみることができるようにした。その結果、児童は何をどのようにすれば、よいか、具体的につかめているので、すすんで、友だちと関わろうとしたり伝わるように表現しようとしたりすることができた。

- 思考力を高めるために、活用できる情報を先に知らせておいたり、児童の意見を2つに焦点化させたりした。その結果、「知り得た情報や自分の考え」と「叙述」を関連付けやすくなり、学習内容に対する理解を深めることができた。理解が深まることで、他教科に習ったことを生かすことができた。

- 単元ごとに成果作品を作ったり、自分や友だちの成長を認め合ったりした。また、学習課題の内容を「対」にして友だち自分の考えを比べられるようにした。その結果、自分の成長に気づいたり、友だちと自分の考えの違いに面白さを感じたりすることができた。

- 学習活動・内容・環境の中でさらに新しい「対」を見つけ、児童がより能動

いつもは、自分の考えを書くのが苦手で、黒板に書かれたまとめを写す児童が、順序を表す接続詞を使って自分の立場を明確に主張している。

的に学習に参加できるようにしたい。

住之江区

大阪市立南港光小学校

岡田 治美 学校長様

提出期日 平成 27 年 9 月 1 日～9 月 30 日

情報を得るために教科書を読み、得た知識と自分のこれまでの経験を織り交ぜて、まず何を一番大切にすべきか「自分の考え」をもてるようにしたあとで、全体で交流した。

<児童の発言>

- ・食べたら、成長のための栄養が取れます。また、お腹がすいたら寝ることができないので、「食事」が大切だと思います。
- ・「運動」すると体の働きがよくなります。
- ・「睡眠」をとると、病気が良くなります。「寝る」と脳がよく働きます。

<考察>

「対」でなかったため、発表するだけに終わってしまい、すべての児童が話し合いに参加することが難しかった。考える視点が二つから三つに一つ増えるだけで、比較する対象が分散してしまうため、活発を交流することが難しいことがはっきりした。